

(パネリスト発言)

第一コンピュータリソース 取締役 赤畑 俊一 氏

“アジアでの事業展開におけるミャンマーの位置づけ、ミャンマー事業展開事例”

赤畑 第一コンピュータリソースの赤畑です。よろしく申し上げます。私のほうからは、第一コンピュータリソース、通称 DCR といっておりますが、DCR の簡単な紹介とミャンマーDCR 設立の背景、それからミャンマーDCR の簡単なご紹介をさせていただきます。

次、お願いします。私どもの会社、第一コンピュータリソースは、コンピューターのソフトウェアをつくっている名古屋の中小企業の会社でございます。設立は昭和 44 年です。今年で 46 年目を迎えております。社員数は 500 名弱、グループ会社合わせて 1500 名弱という会社になります。

次、お願いします。こちらが D グループということで、第一コンピュータリソース、D というかたちで会社をつくっております。海外の拠点が下の黄色の部分になります。北京とタイでございます。

次、お願いします。ミャンマーDCR です。私どもはコンピューターのソフトウェアをつくっているのですが、オフショア開発という言葉がございます。上流工程、要件を確認して、要件を基本設計というかたちにして、その後、詳細設計、プログラム開発というかたちで行っていくのですが、その下流の工程、詳細設計、それからプログラム開発をミャンマーで行っています。所在地はヤンゴンでございます。設立が、先ほどご紹介があったように 2008 年 7 月です。軍事政権のさなかに設立しております。今でこそこういったシンポジウムに呼ばれるようなかたちにはなりましたが、その当時は「なぜミャンマーに」という声が多かったです。社員数は 211 名です。組織はこの後またご紹介させていただきます。

次、お願いします。ここからは、なぜミャンマーに会社をつくったのかというところになります。私ども DCR のアジア戦略の中で、2002 年に中国にオフショアの拠点として北京 DCR を設立しました。当然、オフショアの会社ということでプログラム開発が中心でしたが、中国の中でも北京というところは非常にコスト、人件費の高いところございました。今よく言われているチャイナ・プラスワン、中国の次を探そうというところで、2007 年からアジア諸国をサーベイしてミャンマーという国を見つけました。当然、ベトナムとかタイとか非常にいい国もあったのですが、私ども中小企業が行く場合に、ベトナムなんかは大手さんがもう既に出ておりました。そういったところで、太刀打ちできないというところで、当時まだ軍事国家であったミャンマーという国に進出することにいたしました。

次、お願いします。ミャンマーのオフショア拠点としてのポテンシャルです。これは進出コンサル会社なんかがよくご案内している内容と重なってしまいますけれども、1 番目に人件費が安い。これは 2008 年当時です。今はやはり上がってきています。それから優秀な人材が集まる。私どもは大学の新卒の人間を採用しております。

ヤンゴンにはヤンゴン・コンピュータ大学という非常に優秀な学生が集まっている大学

がございます。その卒業生は就職する会社がございますでした。卒業しても、新卒で採ってくれるソフトウェアをつくっている会社というのは現地にはなかったのです。ほとんどがやはり経験を積んだ人、そういった人を求めておりました。私どもは新卒で採って IT の教育、それから、私どもは公用語が日本語ですから、日本語教育を行いながら育てていくというかたちでやっております。

あと、3 番目、4 番目、親日とか仏教国というのはよく言われている話になります。5 番目、日本から進出している企業は全くありませんでした。そういった中で、先駆者としてのアドバンテージが得られるというふうに判断しました。

6 番目、2008 年当時もやはりインフラはまだまだでした。ただし、インターネットは使えました。2008 年と今年を比べると飛躍的にインフラは整備されています。まだまだ停電が多くてジェネレーターを回すような機会が多いのですが、今では停電は非常に少なくなっていますし、インターネットの回線のスピードはその当時に比べて非常に早くなっています。ただし、切れることはありますので、そういったことを念頭に置いたかたちの作業の進め方が必要になります。

7 番目、勤勉で仕事や将来の目標に対するモチベーションが非常に高いです。私どもも日本で新人を採用しておりますが、今どきの日本人よりも非常にモチベーションが高く、将来何になりたいという目標をしっかりと持っています。なかなか今の日本人の中では持っていない、将来何になりたいかというのをしっかりと持っているミャンマー人の方は非常に多いです。

あと 8 番目ですが、日本語の習得が早いです。これもよく言われていることですが、語順が日本語に非常に近いというところがあると思います。ただし、皆が皆しゃべれるかというところではなくて、やはり現地の日本語学校に通わせる等のそういった教育が必須になるというふうに思っています。

次、お願いします。私どもの簡単な事業内容になります。上のほうのアプリケーションのソフトウェアの開発、これがメインでございます。そのほかに、現地の日系企業のネットワークサービスなんかもやらせていただいています。

次、お願いします。組織になります。一番上に私がおりますが、今はほとんど、2 カ月に 1 回ぐらいしかヤンゴンには行っておりません。その下にいるジェネラルマネジャーの小林、それから、下に日本人のスタッフの伊藤というのがいるのですが、2 人で現地の 200 人強を回している状況です。上級マネジャーとしてミャンマー人の方 2 名、それからマネジャーとして 5 名です。権限を徐々にマネジャーに移して、日本人がいなくても運用できるような会社運営を将来続けたいと思っていますので、そういったかたちで徐々に日本人の数を減らしている状況です。

あと、皆さんから見て右側ですが、日本にも派遣しております。東名阪に、教育というかたちでもあったり、それからお客様に行き仕事をしているパターンもありますけれども、50 名弱のミャンマー人を派遣しております。

次、お願いします。ミャンマーDCRの特徴になります。1番目が、先ほどお話した優秀な人材が採用できるということです。毎年1000人規模の応募がございます。ヤンゴン・コンピュータ大学も含めて、コンピューター系の大学から多くの応募をいただいております。それから2番目、人材教育というところ、そういったところに非常に力を入れております。

3番目は飛ばしまして4番目です。社内公用語は日本語です。作業指示、朝礼、ミーティング、メール、テレビ会議、お客様とのメール、テレビ会議も含めて全て日本語で行っています。日本側から出す設計書といわれているものも、日本のパートナーさんに出す設計書と同じレベルの日本語で書いてミャンマーでいま作業を行っています。下が日本語スキルの一覧になります。N1、N2といってもなかなかわからないのですが、日本語検定試験1級、2級の取得者の数になっております。

次、お願いします。ここは開発実績になりますので、資料のほうを見ていただければと思います。

次、お願いします。ここが品質管理に関する取り組みです。ソフトウェアの開発をやっておりますので、品質管理というのは非常に重視されます。日本の親会社と同じような品質管理の取り組みをやっているという資料になります。

次、お願いします。セキュリティへの取り組みです。こちらも同じです。非常にセキュリティの面でも日本と同じ体系をつくってやっているという状況になります。私のほうからは以上になります。ありがとうございました。(拍手)